保育　実践事例１

遊びを通して友だちとともに考えながら，伝え合う子ども

－ 年長５歳児・転がしコース遊びを通して －

１　保育の構想（年長５歳児つき組・７期：６月上旬～７月中旬）

⑴ 子どものとらえについて

本学級の子どもたちは，新しい環境（クラスや担任，友だち等）になり緊張している子が多く，担任とのかかわりを求めてくる姿が多く見られた。そのような姿から，安心して過ごせるように子どもたち一人ひとりの気持ちを受け止めるように努めてかかわっていったところ，次第に不安なく，園生活を楽しむようになり，担任が傍にいなくても遊びに向かう子が多くなった。

新しい環境に少しずつ慣れ始めた頃から，仲良しの友だちと気に入った場所（遊戯室の積木置き場や築山の下の木陰等）を決め，一緒に遊ぶことを喜ぶ姿が多く見られるようになった。まだ，続けて同じ遊びをしたり，夢中になって遊んだりすることはなかったが，「あれしたいな，これしたいな」と色々な遊びに向かっていく子どもたちの姿があった。その中で仲良しの友だちと一緒に遊んでいると，自分の思いを言葉にすることが難しく我慢しすぎてしまったり，逆に自分の思いを伝えたいあまり強い口調になったりすることで言い合いになったりすることもあった。

以上のような姿から，楽しく遊んではいるが，自分のしたい遊びをみつけることが難しいように感じたので，教師が遊びを提案したり伝え合う場で友だちがしている遊びを積極的に伝えるように努めたり，園庭に出るように積極的に声をかけたりしながら，好きな遊びがみつかるようにはたらきかけていった。また，同じ場で遊んでいる友だちと楽しくかかわれるように教師が子どもたちの思いを引き出したり，代弁したりしながら意識して子どもたちをつなぐ言葉をかけていった。

しかし，６期頃（５月末）の様子からは，一つのことにじっくりと集中して取り組めないことや，友だちと一緒に遊んでいる中で，どのように自分の思いや考えを伝えてよいかわからないことなど，友だちと相談しながら遊びを進めたり，考えながら遊んだりする姿はあまり見られなかった。

⑵ 保育で考える思考力・判断力・表現力の育成と保育のねらいや内容との関わりについて

上記で述べた姿を踏まえ，７期では３つの内容を中心に経験させていきたいと考えている。

・いろいろな友だちと一緒に遊ぶ楽しさを感じさせたい。
・友だちと遊ぶなかで友だちの考えに触れたり自分の考えを表現したりする経験をさせたい。
・自分なりのめあてを明確にし，そのめあての実現に向け，試行錯誤していく経験を重視して思考力・判断力・表現力の基礎となる体験を重ねさせたい。

一つの遊びに継続して取り組む活動の過程を通して，思考力・判断力・表現力を培い，自己充実感を感じられるのではないかと考えた。そのために，６月上旬から数人の子どもたちが楽しみ始めた転がしコース遊びを意図的に支えていこうと考えた。

以上の保育の構想や願いをもちながら，７期では次のようなねらいを設定した。

○いろいろな遊びに取り組む中で，願いや意図をもって，「明日もこれをしよう」と遊びへの具体的なめあてをもつ。
○身近な環境に興味をもちながらかかわり，遊びに取り入れようとすることで新たな遊びを考え出す。
○同じ場で遊ぶ友だちと思いや考えを出し合い，試したり工夫したりしていく。その際に遊びの中で，友だちに自分の思いや考えを表現したり伝え合ったりしながら，自分たちの願いを実現していく。

このような体験を積み重ねていくことが，８期（９月～10月）での，たくさんの友だちと考えを出し合いながら相談をしたり，自分たちで遊びを考えていったりするような子どもたちの姿につながると考える。さらに，数人の友だちと一緒に協力して実現していこうと遊びのイメージや目的を共有して，力を合わせたり試行錯誤したり問題解決（思考し判断しながら遊びを進めていく）したりしながら遊びに取り組んでいくなどの小学校以降の協同した学びにつながると考える。

(3) 11年間を見通した思考力・判断力・表現力の育成に関する伝え合う場の構想について

この時期は，育ってきた環境や生活経験の違いから個々の子どもにより発達の差が大きい。また，子ども一人ひとりの興味・関心も違っている。そこで，興味・関心の違いにより生まれる学びを生かすために，教師は素朴な思いや遊びにも気づくことのできる感性をもち，積極的に子どもの思いを認めていく。そして，たくさんの友だちとの遊びを通し，自分とは違う考えに気づくことができるように声をかけていく。それにより，子ども自身も友だちのことを受け止められるのではないかと考える。また，同じ遊びをしている子どもたちだけではなく，違う遊びをしている友だちのことにも気づけるように，遊びの共通点を見出し，それを教師がとらえ，つなげるきっかけを子どもたちに与えていくことで，友だちのことを自分のことのように感じられるきっかけができると考える。教師のそのようなはたらきかけや子ども同士のかかわりにより，伝え合う場が充実していく。学びの芽生えを育てていくことが小学校への自覚的な学びにつながっていくことを願っている。

以上のような個々の子どもたちにより，発達の違いや興味・関心の違いがあることを踏まえ，「自分でみつけた遊び」の後に，学級みんなで楽しかったことや困ったことなどを伝え合う場を設定し，自分の思いや考えを表現していくことを大切にしていく。また，「自分でみつけた遊び」の中でも，遊びの場ごとに，気づいたことや感じたことを伝え合う場を設けていき，友だちの思いや願いに気づいたり受け止めたりする経験を積み重ねていくことで，興味・関心を広げたり膨らませたりすることができると考える。そのための伝え合う場（少人数・学級）を次のように構想している。

「思考力・判断力・表現力」の育成に関する伝え合う場の構想

□… 予想される子どもの姿　　□… 教師のはたらきかけ

自分でみつけた遊び	・ホワイトボードの写真を見ることで，前日の遊びを思い出し，「今日も続きをしよう」と遊びに向かう。 ・したい遊びを見つけ，継続して取り組む。 ・友だちと一緒に遊びに適切な場所や物を選んで遊ぶ。 ・友だちと遊ぶ中で，困ったことがあると友だちに助けを求めたり，考えを聞いたりする。 ・友だちと相談しながら遊びを進めていく。 ・「もっとこうしてみたいな」と思った時に周りの環境を見渡し，使えそうな物を選択して遊びに生かしていく。	・今日の遊びにめあてがもてるように，言葉かけをしたり，ホワイトボードに前日の遊びの姿（写真）を掲示したりしておく。 ・「～がしたいな」と考えた子どもなりの発想を大切にしていくとともに，その子の願いや考えを実現することができるよう，教師も一緒に考えていく。 ・子どもたち自身で考えていこうとする姿があれば，必要に応じて見守ったり，思いを引き出したり，子どもたち同士の思いをつなげたりする言葉をかけていく。
学級で共有する活動（伝え合いの場）	・遊びの中で「楽しかったこと」や「困ったこと」を友だちの前で話す。 ・友だちの「楽しかったこと」や「困ったこと」を聞く。 ・友だちの話を聞いて，その遊びに興味をもち，質問をしてみる。 ・遊びの中で作ったものや遊びに使ったものを実際に見せる。 ・友だちの話を受け止め，楽しさに共感したり，共に考えたりする。 ・友だちがしている遊びをクラスのみんなで楽しむ。	・「楽しかった」や「困った」だけで終わるのではなく，「どんなところが楽しかったのか(困ったのか)」と問いかけていくことで，子どもならではの具体的な考えや工夫を引き出し，その考えを認めていく。 ・子どもたちの考えが言葉だけでは学級全体に伝わりにくい時には，教師が言葉を補ったり，ホワイトボードに図示したりすることで，できるだけ学級全体に伝わるように努める。 ・学級全員で遊びを体験してみることで，新たな考えが生まれたり，遊びが深まったりするきっかけを与えていく。

2　この期の活動の構想　　（年長５歳児つき組・７期：６月上旬～７月中旬）
～「転がしコース遊び」での予想される子どもの姿と伝え合う場の環境の構成について～

次	転がしコースの遊びで予想される姿	伝え合う場の環境の構成
1	・友だちのしている遊びに興味をもち，一緒に遊ぶことを楽しむ。 ・砂，土，水の感触を楽しみながら，だんご作ったり転がすための溝を作ったりして遊ぶ。 ・「こうしてみよう」と自分なりに考えながら，自分でみつけた遊びを楽しむ。 ・自分の考えや思いを，自分で伝えようとしたり，難しい時には教師を通して伝えたりしていく。 ・トイの並べ方をその都度変えながら，だんごが転がるコースを作っていく。 ・「この遊び楽しいな」と自分のしたい遊びをみつけ，めあてをもって取り組む。	○友だちの楽しかったことやうれしかったことを聞き，「明日はこれしてみよう」「やってみたいな」と興味やめあてがもてるようにする。 ○どんなところが楽しかったのか，うれしかったのかを友だちに質問し，具体的なイメージを共有できるようにする。 ○遊びの中でどんなことをしたのか，どんなものを作ったのかを実際に見て，友だちのしている遊びを知る。
2	・砂，土，水の特性に気づき，試したり利用したり，工夫したりしながら数人で遊びの目的や意図を実現していこうとする。 ・「こうしてみよう」と自分の考えを友だちに伝え，一緒に遊びを進めていく。 ・友だちと思いを伝え合いながら，困ったときにはどうしたらいいか一緒に考えを出し合っていく。 ・遊んでいく中で，遊びがより楽しくなるようにだんごだけではなく転がるものを自分で選んだり，友だちとコースを作り変えたりしながら転がるコースを試していく	○遊びの中で楽しかったこと，困ったことを友だちと一緒に話し合ったり，「こうしてみたら？」「そうしよう」などと，考えを出し合ったりする姿を支える。 ○友だちの話を聞いて，一緒に遊んだり考えたりしながら一つの遊びにめあてをもち，集中して取り組めるようにする。 ○学級全員で，友だちが楽しんでいる遊びを一緒に楽しむことで，楽しさを実感できるようにする。

3　学び合いにつながる思考力・判断力・表現力の見とりの観点

本園の保育の構想で示しているように，保育における評価は本日の保育の展開（指導案）の中に見とりの観点を書き込んでいくが，今回は転がしコース遊びにかかわる見とりの観点のみ抜粋して記載する。

次	転がしコース遊びの見とりの観点
1	・友だちと同じ場で遊ぶことを楽しみながら，自分の思いを友だちに伝えている。 ・友だちのしている遊びに興味をもち，自分なりのイメージや考えをもって遊びに取り組んでいる。
2	・友だちと一つの遊びを共有する中で，自分の考えを伝えたり，友だちの考えを受け止めたりしながら遊びを進めている。 ・遊びの中で，友だちと相談したり分担したりしながら遊びをよりおもしろくしていこうと工夫している。 ・一つの遊びを連続的に追求している。

4　活動の実際

本学級の園児Ａはなかなか遊びが見つかりにくかったが，教師が過去の遊びの経験を引き出していくきっかけを投げかけると，遊びたい気持ちが出てきたようで，園庭に出て，だんご転がしをして見せてくれた。すると，周りを見渡し始めたかと思うと，身近にあったトイを見つけ出し，そのトイを築山に並べ出したところから築山での転がしコース遊びが始まった。初めは園児Ａと教師との遊びだったが，遊びを見てやりたくなった子どもたちが集まってくるようになり，６月中旬頃には数人で転がしコース遊びを楽しむようになっていった。

以下の実践は，始めは同じ場で遊んでいるというだけで，考えを伝え合ったり，一緒に考えたりすることは少なかったが，教師が子どもたちの考えをつなげていったことで思いを伝え合う姿が見られた事

例である。［☆は教師の意図とはたらきかけの実際］

(1) 7期1次・年長6月　～ゴールまでころがったぞ！～

（園児Bは転がしコースを長くしたいようで，しきりにトイを並べている。）
（園児Cは転がすためのだんごを何個も作ってはコースで転がすことを楽しんでいる。）
（園児AはBやCの姿を見て，立ち止まっている。）

園児B　「ほら，こんなにながくなったよ。ころがしてもいいよー」
園児A　「ながすぎるととちゅうでとまってしまうけど」　と一人ごとのようにつぶやく。
T　「何が長すぎるといけんの？」と，園児Aのつぶやきをとらえ，思いを引き出す。☆
園児A　「コースがながすぎると，とちゅうでとまってしまうもん。」
T　「何が途中で止まってしまうの？」
園児A　「だんごが。」
T　「どうして途中で止まるんだろうね。」☆原因を考えるきっかけをつくる。
園児A　「だってここ，ずれちょるでしょ。それにぶつかってしまうもん。それにすべりだいみたいになってないけん。」
T　「そうなんだ！その発見はすごいね。でも，どうして途中で止まることがわかったの？」
園児A　「だってまえやってみたもん。」
T　「じゃあその発見，BくんやCくんにも知らせてあげたら？きっと知らないと思うよ。」
園児A　「・・・」　どのように伝えていいかわからないようである。
T　「じゃあ先生と一緒に知らせてみようか」☆
（教師は園児Aと一緒に園児BとCに声をかける。）
T　「Aちゃんがね，すごいことに気づいたけん，みんなに知らせてくれるって。」
園児A　「あんまりコースをながくしするとだんごがとまってしまう。」
園児B　「なんで？」
園児A　「ここのみちのところがずれてるでしょ。そこでとまってしまうけん。」
園児B　「でもはやかったらすすむよ。」
園児A　「すすむかもしれんけど，とちゅうからすべりだいみたいになってないけん，ゴールまでいけんよ。」
園児C　「ほんとに？やってみる！」
（園児Cがだんごを転がすとゴール手前で止まってしまう。）

T　「Aくんが言った通りだね！」
園児B　「ほんとだ。じゃあどうやったらゴールまでいけるの？」
園児A　「ここんところをすべりだいみたいにたかくせんといけん。」
（園児Aはカップをトイの下に置き，トイを高くして見せる。）
（園児Cが再びだんごを転がすとゴールまでたどり着いた。）
園児C　「Aくんのかんがえすごい！ほんとにできたよ。」
（その後，数分ではあったが，片付けの時間まで3人はトイを並べ変えながら一緒に遊ぶようになった。）

園児Aは過去にだんご転がしをした経験があったことから「だんごが転がるコースをつくりたい」という遊びのイメージをもっていたが，園児Bや園児Cはだんごを転がすことを楽しんでいたり，コース作りを楽しんでいたりとそれぞれの遊びを楽しむというところで留まっていた。そこで，教師が園児Aの思いを引き出したり，園児Aのイメージや考えを園児Bや園児Cと伝え合う場を意図的に設けたりした。このことが，園児Aのイメージや考えを知るきっかけとなり，一緒に遊ぶようになっていったと考える。そのように，子どもたちの様子を見て，適宜教師が遊びに参加したり考えるきっかけを作ったり，考えを引き出したりしていくことで，子どもたちは伝え合う良さや分かり合う良さを実感することができた。

その後，転がしコースの遊びは園児Aを中心に園児Bや園児Cも加わり，互いに思いを伝え合いながら，遊びが継続していくようになった。また周りの子も興味をもつようになり，それ以降，転がしコースを楽しむ姿が多くみられるようになっていった。しかし，その頃は梅雨の時期に入ったため，築山でだんご転がしができず，困っていた。そこで，教師は保育室でできるようにと空間を広めに確保してお

くことと，新たな発想が広がるようにだんごの代わりに転がると考えられるものや使えるもの（ペットボトルのふたやペットボトル）を保育室に置いておいた。

(2) 7期2次・年長6月　～おへやでもできた！～

（子どもたちは今日も転がしコースができず，残念そうにしていた。）

T　「だんご転がし，雨だとできないんだね・・
せっかくやる気満々だったのにね。」

園児B　「だってつきやまじゃないとできんし。」

園児D　「つきぐみでもできればいいのに。」

T　「つき組でもって，お部屋でもできたらってこと？」

園児D　「つきぐみのなかにつきやまがあったらあめでもできるじゃん。」

T　「そうだね～。じゃあ保育室に築山はないけど，お部屋でだんご転がしできるいい考えない？」☆

（その投げかけの後，保育室の中を見渡していた園児Aはテラスにあったトイを保育室に持ってきた。）

園児B　「どっかならべられるばしょ，ある？」

園児C　「（ロッカーを指さして）ここは？ちょっとたかいし。」

（園児Aはトイをロッカーに置いてみる。）

（その後，ロッカーに立てかけたり，スチール棚に立てかけたりといろいろなところにトイをかけてみては転がすことを試すが，トイが短くすぐに終わってしまい，だんごが床に当たって壊れ，砂だらけになることに困っていた。）

T　「外みたいにうまくいかんね～やっぱり外じゃないとだんご転がしはできんのかなぁ。」

園児B　「よごれてしまうけん，いけんわぁ。」

T　「汚れないでできる方法があるといいのにね～それは無理かぁ。」

園児C　「いしでやってみるとかは？」

園児B　「いいかも。やってみよ。」

（園児Cが石を転がしてみるが，だんごのように転がらない。）

園児A　「これだったらころがるよ」と廃材置き場からペットボトルのふたを探し出し転がし始めた。

園児D　「これいいじゃん。よごれんし。」

園児A　「いっぱいするといっぱいころがるよ。」

園児B　「でもこれ，ずっとはころがらんよ。」

T　「なんでずっとは転がらんの？」

園児B　「だってこのむきだったらいいけど，こうなったらとまってしまう。」

（キャップの向きを変えながら，周りの子どもたちに話をしている。）

園児A　「じゃあ，ひっつけたらいいじゃん。」

園児B　「こんなかんじ？」キャップを2つひっつけたものを見せる。

園児D　「ちょっとやってみてよ。」

園児B　「だいせいこう！」

園児D　「ほんとだ。ちゃんとゴールまでいくし，はやい！これいいね！」

（その日からペットボトルキャップで転がすことを楽しんだり，より長いコースにしようとペットボトルで高さを調節したりしながらコースを工夫する姿が見られるようになった。）

子どもたちの中で「転がしコースは築山でするもの」という固定観念があったが，教師が考えるきっかけを与えることで，子どもたち自ら柔軟に室内の環境を利用した遊び方を発想して，ふさわしい場所や物を考え出すことができた。また，友だちと一緒に考えたことを話しながら，いろいろな場所で試したり，工夫したりすることで遊びがよりおもしろいものになっていった。この時期はなかなか言葉だけでは思いや考えが伝わりにくいが，思いを出し合って転がしコースを作り変えたり実際に使ったキャップを見せ合ったりすることで，思いや考えを共有することができる。

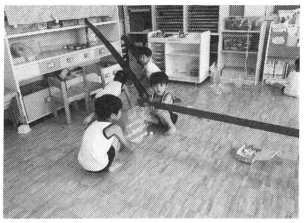
転がしコースが保育室内にもできたことで伝え合う場において話題になることも増え，たくさんの子が転がしコースに興味をもつようになっていった。また，友だちの姿を見てやってみようとする子も増えてきた。そこで，転がしコースを楽しむ子どもたちから「みんなでしてみたい」という希望があった

ことと，学級全体で共有してほしいという教師の願いから，遊びが広がるきっかけになるようにと学級全員でこの遊びに取り組んでみることにした。

次項の姿は，活動後の伝え合う場での姿であるが，学級で伝え合うことで，新たな発見が見られた。

(3) 7期2次・年長7月　～みんなで転がしコースしたよ！～

園児E　「ぼくのすごいはやさだったけん，（ぼくが）おいつかんかった。」
園児F　「Eくんのはやかったけんレースしたが。」
T　「転がしコースでレースもできるんだ！楽しそうだね。2人の転がしたものはキャップだったの？」
園児E　「ぼくはビーズでFくんはまるいつつ（フィルム）だった。」
T　「キャップじゃなかったんだね。違うものでも転がるんだ！それ発見だね。」
園児F　「だってAくんがまるいものはころがるっていってたけん。」
T　「Aくんは転がしコースの名人だけん，転がるものがわかったんだ。
みんなに教えてあげたけん楽しくできたかもしれんね。」
（あまり興味を示していなかった園児G，Hがどのように感じていたかを知るため，問いかけてみた。）
T　「Gちゃんはずっとコースを見ててくれたけど，どうだった？」
（なかなかいいにくそうにしていたが，どんなところを見ていてくれていたかを聞き出していった。）
園児G　「すごいながいコースだったけん，もっといろんなコースつくったらいいとおもう。」
T　「いろんなコースっていうのは？」
園児G　「1つだけじゃなくて，3つくらいあったらもっとたのしくなるけん。」
園児H　「みじかいのもあっていいとおもうけど。」
T　「長いコースや短いコースがあるとおもしろいってこと？
確かに選べたらおもしろそうだね。」
園児B　「じゃあもっとたくさんコースつくらんといけん。」
園児F　「おべんとうのあと，つくったらいいじゃん。」



学級で転がしコース遊びを共有し，話を聞くだけではわからなかった楽しさを実際に体験したことで，楽しさを感じられる子どもも多くいた。さらに，キャップ以外のものも転がるという新たな発見もあった。興味を示していた様子の園児Gや園児Hにも教師が問いかけることで，それぞれに「もっとこうしたらいいのに」と，自らの考えを話すことができ，もっと遊びが楽しくなるためのきっかけを周りの子に与えることになった。そして，今まで転がしコースを経験していた子たちが経験を通して気づいたことを周りの子どもたちに伝えることで，初めて遊んだ子も転がしコースのイメージを明確にでき，遊びにふさわしいものを自ら探し出したり，新たな発見をしたりするきっかけともなった。

5　成果と課題

今回の実践において，子どもたちは遊びの中で思いを伝え合うことで，自分の考えを確かにしたり，友だちの思いを受け止めたりしていく経験を積み重ねることができた。その過程においては子どもたちの思いや遊びの経過をとらえ，遊びの中で適宜教師が介入しながら，子どもたち同士の伝え合う時間を設けていったことは大切であった。また，学級全体で伝え合うだけではなく，友だちが楽しんでいる遊びをクラス全体でやってみることで，楽しさを味わったり友だちの考えを知ったりできる機会となったように思う。このことは，子どもたちの遊びを広げるということにとどまらず，新しい願いや追求を生み出すきっかけにもなった。

今回の実践では発達の違いや興味関心の違いなどもふまえながら，伝え合う場を構成した。その中で，学級全員で遊びを楽しんだり，視覚的に伝えたりすることで，子どもたちそれぞれに考えや思いを伝え合うことができたと実感している。しかし，子どもたち自身が心から「やってみたい」と思える環境の構成はどうであるかを深めるまでには至らなかった。今後は園庭や保育室など環境をどのように新鮮な目をもって捉え，利用していくことで子どもたちが遊びを追求していくのか，そしてどのようなはたらきかけが有効であるのかについてはさらに研究を継続していきたい。　（文責　名越　絵美）